木村文助研究

通信　２９号　二〇一四・五・一

北秋田市との交流を

＝市政文化財懇談会から＝

昨年一一月に恒例の文保研と市教委との市政文化財懇談会を行った。

内容は諸々の課題九点あり、その一つ「綴り方指導者・木村文助に関連し、初期の任地である北秋田市との交流が必要と考えますが」の問いに「検討させてほしい」と返事だった。

平成一八年発行の『新大野町史』には、「教育」、「文化財」、「人物」、「年表」の随所に文助が大野小学校で綴り方に取り組んだ経緯や「赤い鳥」に選ばれた子どもたちの名まで載っている。

北斗市郷土資料館には、入選作の載った綴り方五九編も含め『赤い鳥』（復刻版）一九五冊、文助や研究者の論文・資料等多数が「赤い鳥・木村文助」コーナーに収められている。いつでも閲覧できるので、交流に役立ててほしいものである。

なお、今年の秋には資料館が北斗市総合分庁舎（旧大野町役場）二階へ移転になる。

二〇一三年

一一・七　「木村文助研究」通信２８号発行。同拡大版を公民館へ展示。

二〇一四年

一・六　北斗市教育広報「きらめき」No.３１に綴り方「兄」高１・中村よしえ、自由画「風景」高１・伏見かをる、載る。

一・九　文保研例会で市教委より新郷土資料館移転計画の説明を受ける。展示コーナー、北斗市ゆかりの人物に木村文助も入る予定

二・二一　函館歴史的風土を守る会から、大野小学校鎌倉健二教諭が「歴風文化賞」を受ける。

木村文助や綴り方を含めて大野地区の歴史等を同校の学習発表会に何年も脚本作成・児童指導に当たったことから、高く評価された。

郷土史の
文化賞得て
春待つ師

連載

『赤い鳥』に載った郷土の作文

大正から昭和の初め、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。大野小は当時、木村文助校長が子どもたちの綴方(作文)や絵を投稿し次々と入選。「日本一の綴方学校」と言われました。

兄

大野小高一　中村よしえ

二番目の兄は小さい時から、大そうきかない子供であったそうですが、こうんだのが元で、一本足の片輪になりました。それで、「おれば（を）、どうして片輪にしたば（のか）。どこさでも行くして（どこにでも行くから）、銭けせ（くれ）」などといって母にかかる（つっかかる）こともあります。十二月ばでの田植でした晩、父が「東京あたりさ行っても辛抱して、銭使つかわねようにしねばわかねど」と言っていたので、私は、市兄、東京へ行くだろうかと思ったが、そのまま寝た。次の日、家内のもの、皆田植に行きました。市は十一時頃、ふとんを枕に、何か読んでいたが、間もなく祖母に「ばばちゃん、体大切にしせ（しなさい）そして子さ、わらびなんて取ってけせ（おくれ）の、おら、は（もう）、行くんだえ」と言った。祖母は「おや、銭もらった？」と言うと、「これ」と言って、財布をあけて見せた。「おや」と祖母はびっくりしたような顔をして「なんぼな」というと、「三百円せ」といって言ったような顔つきでいた。祖母は「来、兵隊に行くとき何にも気にしなかったが、これ行くてば心配でなねね（ならね）。どうして片輪だもの、どこさいっても、何かせるものであるめし（何一つできるものでもないし）、未だら、どこさ行っても体てば悪くねし（ないし）、自分で働けば、なんでもできるもんだも。これ行くてば、何だか気持悪ねなあ」と、私に言って、涙をふいていた。私も思うと、ひとりでに涙が出て恥ずかしかった。

昼頃、田植に行っていた母に、妹を乳を飲ませに行って、置いてくると、兄と一太の幸三さんと何か話していた私は一人でご飯を食べて、妹を迎えに行った。母は妹をおぶって来た。そうして「市、行った？」と私に聞いたので「まだいだえ」と言った。兄は裏の方に出た時、ちょうど母が出て来た時であったが、兄は何思ったのか、おいおい泣いていた。母は何か聞いていた。私はそれを見るとこらえきれないで奥に入って、布団をかぶって泣いた。

妹のくに子は何にも知らず、家の中をまり回っていた。そのうちに、「くに子、さよなら」と兄が言う声がした。

妹も「あえな（さようなら）」と言った。私はもう兄も行ったのだと思うと、また涙が出てならなかった。次の朝、私が起きると、母が「市、むったり（いっつも）朝起きれば、ぼつぼつと杖をついて、裏の方に行ったどもなあ（けれどもな）」と言って、末の妹に「市どした」と聞くと、妹は「ずっと（とおいところ）・・・・」。「なんて言った」と聞くと、「あえなて（さようなら）」と言いました。

（大正十五年二月号）

童ことばの意味

【片輪】源氏物語でも使用されている古い言葉で、体が肉体的に欠損や不具合があることやそのような人を指す。

風景　大野小高一　伏見かをる
（昭和2年9月号）

綴方選評

鈴木三重吉

この作品は事実にも叙写にも、あふれている、すべての純朴さに引きつけられる、しんみりとした作です。兄さんは、お金をかなりもらって、東京へ行ったというだけで、くわしいことが書いてありませんが、東京のどこをあてに出てきたのでしょう。そのこと自身が何よりも真感と不安を誘います。

叙写の中では、兄さんが裏へ出ておいおい泣いていたというところや、しまいの方で、お婆さんが「市、むったり、朝起きれば、ぼつぼつと杖をついて、裏の方に行ったどもなあ」と回想されたりするところなぞは、しみじみあわれです。

自由画選評

山本鼎

伏見かをる君の「風景」、鉛筆の線が、ぼさぼさして、味わいに乏しいが、弱くないところがいい。ぐるぐる回した草木のかたまりよいとして、あまりにトオンがなさすぎる。ただ黒い影坊主（シルエット）だ。

（編集・社会教育課　京谷　亨）

2014年(平成26年) 2月7日(金曜日)

函館新聞

歴風文化賞決まる

個人に鎌倉さん

函館の歴史的風土を守る会（歴風会、佐々木馨会長）は、2013年度の「歴風文化賞」を発表した。歴史的な建造物の貴重性、持ち主の保存に対する努力や景観へ寄与した個人などをたたえるもので、本年度は保存建築物として「長崎ミサ邸」（函館市神山3）「料亭　冨茂登」（同宝来町9）、再生保存建築物として「久末宏治邸」（同石川町255）を選んだほか、個人賞に北斗市立大野小教諭の鎌倉健二さん（54）、原風景に「旧戸井線のアーチ橋」を選んだ。表彰式は21日午後6時半から、五島軒本店（末広町）で開かれる。（千葉卓陽）

長崎邸は1946年にかやぶきの建物を建て替え、細工が施された外壁やレンガ積みの集合煙突など、創建時の姿で保存されており、「昭和前期の農家住宅の歴史を知る上で貴重」と評価した。

冨茂登は木造2階建ての料亭として建築され、室内も創建時のまま保存されていることや、室内から和風庭園を望むことができる点を評価。昭和前期の商業建築を今に伝えている。

久末邸は戦後建てられた木造平屋建の農家住宅。室内の柱や梁は創建当時の姿を残すとともに「幹線道路に面しており、昭和前期のほのぼのとした雰囲気が伝わってくる」と評した。

個人賞の鎌倉さんは大野小で意冨比神社や大野郷土史かるた、北斗市郷土資料館を教材に取り上げ、学習成果を劇に仕立てて披露するなど、地域に根差した教育姿勢が受賞につながった。またアーチ橋に関し、同会は「現在でも産業遺産として大きな存在感を示している」として原風景に認定した。

歴風文化賞は1984年度から始まり、本年度で31回目。函館や近郊の歴史ある建造物などを後世に残そうと、昨年までに170件以上を表彰している。

赤い鳥・木村文助コーナー

《北斗市郷土資料館内》

北斗市郷土資料館（旧大野町郷土資料室）
０４１－１２０１
北海道北斗市本町２丁目１２番７号
TEL（０１３８）７７－６６８１
閲　覧　９：００～１６：００
休　館　毎月第一月曜、年末・年始、臨時

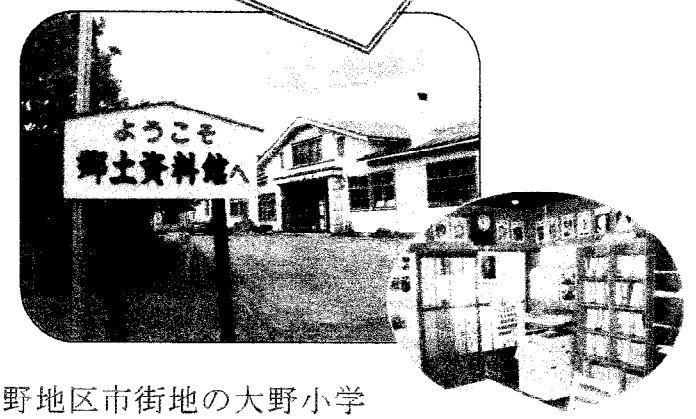
「林芙美子作短編小説に引用」、
「ラジオ放送に引用」、
「北海道教育史に掲載」、
「短編小説的と評価された」など多数の綴り方を収蔵！

『１９２０年代（大正から昭和初期）の田舎の生活・文化がリアルに表現・・・都会の先生が読むと子どもたちは声も出なかったという』

生活綴り方のふるさとを訪ねてみよう！

（「赤い鳥」復刻版全巻、木村文助編著書、写真など多数）

○函館方面→車で、国道２２７号を通り大野市街地へ入る
○道北方面→車で、国道５号の大沼トンネルを抜け、１０分ほどして大野方向へ右折し、更に市街地へ進み５分で着く



大野地区市街地の大野小学校門を入り右側木造の建物

発行・大野文化財保護研究会
（略称：文保研・ぶんぽけん）
会長：木下寿実夫
〒四一－一二〇一
北斗市本町３丁目11番32号
（０１３８）７７・８５３５